



2012年、モロッコの公立小学校を訪問(後方中央が筆者)

アン養成プログラムが誕生した。当時の米国、先行して特にニューヨークでは、産業社会と近代合理主義が徹底し、金融産業の誕生とともに資本主義が拡大、進行していた。米国の多くの人々が身に付ける哲学的な方法などといわれるプラグマティズムの思想も誕生し、広まりつつあった。一方で、自助(HELP)思想とその欠点の補完をする相互扶助、儉約と分かち合い(Sharing)といったプロテスタント思想があり、同じくプロテスタントのものともいわれる天職(Calling)思想を基礎とした専門職文化も広まっていた。そうした米国社

会の多くの伝統的な特徴が、米国の図書館の特異な発展の背景にある。

図書館というと、日本では、図書館資料を整理・管理し、無料で貸出を行うところ、というようなイメージで受けとめている人が少なくないと思う。しかし、米国に限らず、いま、私が世界各地で見る図書館は、そのイメージと必ずしも一致しない。資料を管理し整理するのは、共有、分かち合いを促すためであるが、そのことが広く社会に認識されると感じられるような図書館が増えている。共有というのは、ただ貸出をすることではない。日本では、自分で買うほどではない資料を図書館に無料で借りに行く人が多いかもしれない。しかし、そのような個人個人の占有ではなく、図書館を発展させて他者と資料を共有することが、自分にも恩恵のある合理的な資料管理方法であるという認識が、一定程度共有されている社会が増えている。共有の思想は、単なる資料の共有のみならず、情報、はたまた知の共有をも意味する。人々が図書館を介してつながる、そんな社会である。さて、私たちの社会はどうであろうか。

奨学金制度への思い

この後、ハワイだからこそできた経験、学びについて書くことと書いていたが、紙幅が限

られたなかで、経済界の方々が読まれる雑誌に書くという減多にない機会に、奨学金について感謝の気持ちをこめて、いまも時々思い出すことを、記しておきたい。一九九七年末に、留学後初めて帰国するときに乗った飛行機から見たオアフ島の姿が、私にある決意をさせた。すでに半年以上ハワイで過ごしていたが、そのときあらためて私は、奨学金とはなんとすばらしい制度かと思った。そして、面接官の方たちが、知識としては不十分であった私の、学びへの意欲を受け止めてくださった幸運を思った。

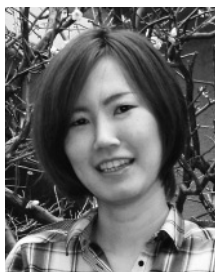
日本では、特に大学院進学へのハードルはまだ高い。いわんや、海外の大学院をや。本当に学びたい人を送り出す、そういう奨学金制度を、私も収入を得られるようになったら、支えていく側に回ろうと、オアフ島を眼下に決意した。そのときの胸の震えは、いまでも鮮明に覚えている。他者の学びに、血縁者とも教師とも違う誰かが関心を持ち、ある種の投資をしてくれたことへの感謝と感動は決して忘れない。私は、学びを社会に還元しなくてはと思っている。途上国の学校図書館開発支援・学校図書館専門職養成支援に関心をもちはじめたのも、このときの思いが一つ影響している。こうした思いを忘れないでいたい。

図書館と社会と私

立教大学文学部准教授・司書課程主任

中村百合子

なかむら ゆりこ



●皇太子明仁親王奨学金(二〇〇八年二月に名称変更)は、現在の天皇陛下のご成婚とハワイご訪問を記念して、ハワイの日系人、ホノルル日本商工会議所、経団連を含めたわが国経済界の協力により、一九六〇年に創設された。日米両国の相互理解と友好親善の推進を目的に、ハワイ大学と日本の大学との相互留学を行っている。

修了し帰国した。しかし、このときもまだ、自分が何を学んだかをわかっていなかったのではないかと、いま、思う。

図書館についてわかってきたこと

米国に図書館情報学を学ぶに行くこと、しかも認証を受けた大学院を修了すること、それが「本場」で学ぶことだと思っていた。図書館の学問、図書館専門職の養成について、米国がなぜ「本場」なのか、そのことを、私は戻ってからずっと考えている。行く前は当然のように思っていたものが、帰ってきたら今度は、あれにはどのような価値があったのか、なぜあれがあそこではあのようなかたちで存在し得るのか、それを理解したいと考えたようになった。

図書館情報学の始まりは、一八八七年にコロンビア大学にSchool of Library Economyが設立されたことにあるとされる。図書館の組織、経済の学問として始まっているわけである。そうして初めて、大学でのライブラリ

一五年前

皇太子奨学金奨学生(一九九七―一九九九年)。図書館情報学修士(ハワイ大学)。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了(博士(教育学))。同志社大学社会学部専任講師・准教授を経て、現職。

図書館情報学を学ぼうと、皇太子奨学金をいただいてハワイ大学の大学院に留学したのは、一九九七年夏から九九年の春である。奨学金を少しづつ貯めて、九八年の夏には、メリーランド大学大学院の夏学期にも通った。

米国では、図書館情報学は主として大学院レベルで学ぶことになっていて、一般に、ライブラリー・スクールと総称される。アメリカ図書館協会という専門職団体によって、大学院の認証評価が行われていて、その認証を受けた大学に行くことにより、図書館専門職・ライブラリアンへの道が開かれる。留学

前に私が知っていたのは、以上のような仕組みのことくらいで、何を本当に学ぶのか、いまだから白状するが、実は全くわかっていなかった。しかし、私がどうしても、留学して学びたかったことは本当である。

皇太子奨学金の場合、日本の大学院に所属していることが応募に際して必要で、私は一九九七年の春に博士課程に進学していたので、戻るべき場所があった。留学当初のカルチャーショック等々、人並みに経験はしたと思うが、他の学生たちのように、ハワイ、米国で就職活動をするのもなく、とにかく本場と思い込んでいた米国の図書館情報学を学んだ達成感とともに、ライブラリー・スクールを